

NJ素流協 News

平成28年11月10日 第142号

平成28年11月10日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館5階)
 TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

平成28年度 林業経営講座(前期)を開催

NJ素流協は、10月17～18日の2日間にわたり「平成28年度林業経営講座(前期)」を開催し、組合員及びその後継者、従業員等28名が出席した。出席者は別表のとおり。

▽1日目 10月17日

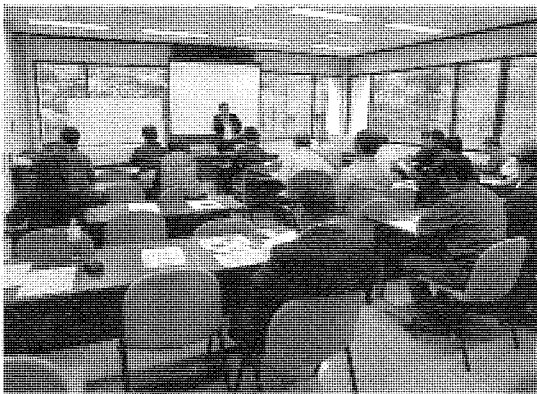
1日目の講義は岩手産業文化センターアピオ(滝沢市)において行われた。

1 「A材からD材丸太の利用法」

講師 NJ素流協理事長

鈴木信哉

はじめに鈴木理事長が、A材から



鈴木理事長の講義

D材までの利用法をテーマに、最終用途を理解しての採材の重要性や、径級毎の需要に応じた仕分けによる有利販売、最近の価格・需要動向、木造公共施設等における新しい木材利用の状況等について、豊富な事例をもとに解説した。

2 「決算書の読み方テクニク」

講師 岩手県中小企業団体中央会

猿川裕巳税理士事務所長

猿川裕巳氏

続いて猿川裕巳税理士事務所の猿川所長から、決算書の読み方の基本と資金繰りの考え方、経営改善のポイント等について、具体的な事例を踏まえ分かり易く解説いただいた。

3 「森林及び木材の病虫害と防除法」

講師 岩手県林業技術センター

首席専門研究員 高橋健太郎氏

県林業技術センターの高橋首席専門研究員からは、素材生産において問題となるスギ・ヒノキ穿孔性害虫の被害の見分け方や防除法と、被害地域が拡大しているナラ枯れ被害の

現状と対策について説明いただいた。

▽2日目 10月18日

1 「広葉樹材の商品としての条件と有利な採材法」

講師 岩手県森林組合連合会

木材部長 田口清治氏

2日目は、はじめに県森連盛岡木材センター(矢巾町)において、田口木材部長から最近の市場の動向と有利な採材法等について、実際に出品された丸太を見ながら解説いただいた。市日を間近に控えていることもあり、土場には多くの丸太が並び、訪れた買い手が熱心に品定めしていた。



田口部長の説明を聞く受講者

広葉樹ではトチ、ウダイカンバ、ケヤキ、オニグルミ、ナラ、イタヤカエデ、クリ、セン、ホオ、ニレ、ヤチダモ、クワ、キハダ、ミズメ等、多種多様な樹種が出品され、このうちウダイカンバ、オニグルミ、クリ、ミズメ等の人気が高いとのことである。ミズメザクラとも呼ばれるミズ



サクラではなくカバの仲間のミズメ

メは、ウダイカンバとともに松本民芸家具の材料として需要があるほか、ランニングマシンの部材としても使われるという。

広葉樹材は、家具や木工品の場合短く切って使うことが多いので、多少の曲がりには気にせず節の無いもの

を2m以上で採材すること、文化財修理用としての需要があるクリは径級50cm上で急激に単価が上がり、長さ2mでも10万円/mの値が付くが、長くなるほど単価が15万、20万...と上がるので、まっすぐな材はできるだけ長く採材するように、等のアドバイスがあった。

針葉樹ではスギ等のほか、アカマツの良材が多数出品されていた。

2「工場が求める丸太規格」

講師 NJ素流協

営業企画部長兼管理部長

小野寺義晃

続いて盛岡物流センター会議室(矢巾町)に会場を移し、当組合が取り扱う丸太の規格と採材の留意点等について、小野寺営業企画部長兼管理部長が説明した。

* * *

お忙しい中快く講師を引き受けていただいた皆様に、厚く感謝申し上げます。

林業経営講座は今年度あと1〜2回の開催を予定してい

ますので、皆様の参加をお待ちしております。

**伐採に係るガイドライン
検討会を開催**

林業経営講座終了後、一部の組合員には引き続き伐採に係るガイドラインの検討会に出席いただいた。

当組合では、昨年9月に宮崎県のNPO法人「ひむか維森の会」顧問の藤掛一郎宮崎大教授をお招きして、素材生産業者が伐採や搬出作業を行

う際の環境への配慮等、先進的な取り組み事例についてご講演いただき、その重要性について認識を深めたところである(本誌130号で紹介)。今後は当組合独自のガイドライン(作業指針)の策定を進めることとしている。

検討会ではガイドライン(案)の一部について、意見交換を行った。今後も検討作業を進めるに当たり、組合員の皆様のご協力をお願い致します。



トピックス

森林・林業・環境機械 展示実演会 京都で開催

10月9日、10日の両日、「2016 森林・林業・環境機械展示実演会」が京都府福知山市で開催され、当組合主催の見学会に組合員と事務局職員計9名が参加した。

会場ではプロセッサ、ハーベスタ、タワヤーダ等の高性能林業機械のほか、移動式チップパーや木材運搬用トラック等の展示・実演が行われた。

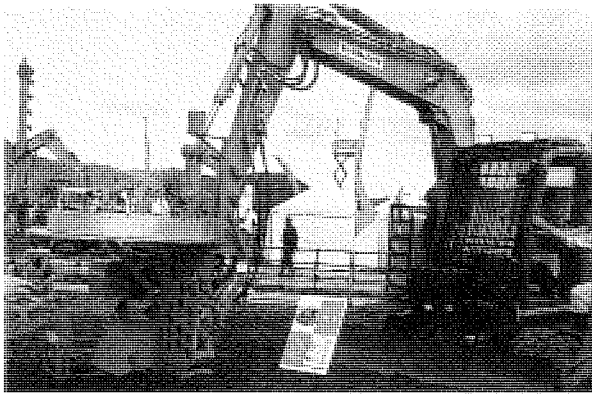


写真1 コンテナ苗自動植付機

(株)レンタルのニッケンは、コンテナ苗の自動植付機の実演を行った(写真1~3)。これは油圧式シヨベルのバケット部に取り付けるもので、耕うん、油圧式ランディングチューブによる植付、苗木周辺のてん圧までの作業を連続して行うことができる。

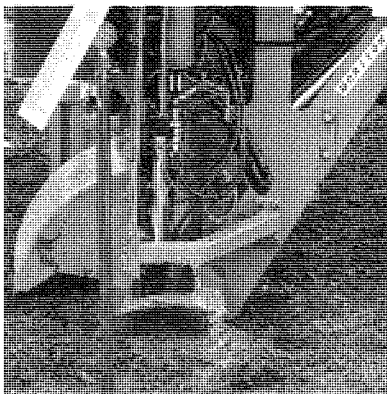


写真3 植付け作業の状況



写真2 苗木セット部分

また新庄自動車(株)のブースでは、当組合員の(有)松田林業(住田町)が導入した原木運搬用トラックが展示され、積み込みの実演が行われた(写真4)。来年は香川県で開催される予定。



写真5 会場前で記念撮影

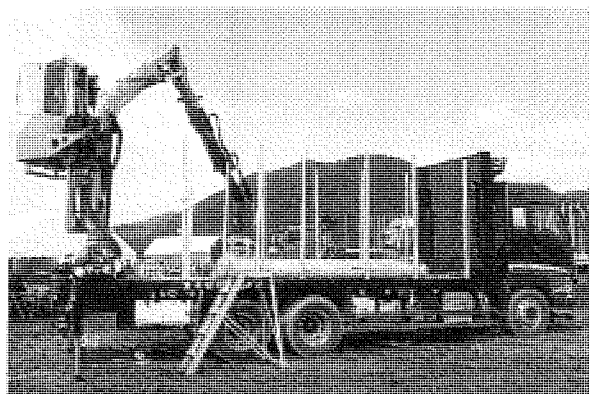


写真4 オペレーター用キャビン付きトラック

福井県林業活性化大会 で鈴木理事長が講演

福井県の森林・林業・木材産業関係者による第38回森林・林業・木材産業活性化大会(主催・福井県森連ほか)が10月12日、福井市において開催され、業界・行政関係者等約350人が参加した。

同大会に伴い開催された研修会において、当組合の鈴木理事長が「住宅以外でのA材の需要・見通しについて」と題し講演を行った。

森林総合監理士フォローアップ研修で講義

10月12日、東京都八王子市の林野庁森林技術総合研修所において、森林総合監理士(フォロースター)フォローアップ研修(木材安定供給 流通編)が開催され、当組合の高橋常務理事ほかによる講義が行われた。

高橋常務理事は、「素材の直送システム」をテーマに、地方公共団体や森林管理局のフォロースター18名に対し、当組合の取組みについて講義を行った。

**全素協理事会に出席
木材運搬用トラックの安全
基準緩和について要望**

全国素材生産業協同組合連合会(全素協)理事会が10月20日、東京都千代田区において開催され、当組合から鈴木理事長、高橋常務理事が出席した。理事会では、森林整備に係る平成29年度予算の確保に向けて、①森林整備予算の拡充について②素材生産業の活性化・育成強化を図る諸対策の予算の拡充について③森林吸収源対策推進のための税制上の措置について④適切な林産物貿易の推進について、の4項目が要望事項として採択された。

また当組合から、木材運搬用トラックの前部潜り込み防止装置に係る安全基準の緩和について、関係団体による所管官庁への要望活動の実施を提案した。

これは、東北地区広域原木流通協議会が10月5日に開催した「運送業者との情報共有化会議」において、出席した複数の運送業者から要望があったもので、トラックのフロントバンパー下

部に設置が義務付けられている潜り込み防止装置(追突時に車がトラック下部に潜り込むのを防ぐ構造)について、現行制度では路面からの高さが40cm以下となるよう定められており、凹凸の激しい林道での走行に支障を来たしていることから、基準が高く設定されているコンクリートミキサー車やダンプ車と同様に45cm以下にするよう、規制の緩和を求めるものである。

翌21日は、全国国有林造林生産業連絡協議会と合同で、国会議員、林野庁幹部への要請活動が行われた。

**森林作業道オペレーター
研修を開催**

NJ素流協は10月25〜28日の4日間にわたり、紫波町内の㈱イワリン所有林において、森林作業道設オペレーター研修を開催した。

同研修は(一社)フォレスト・サーベイからの受託により毎年開催してきたもので、当組合員である西間薫氏、畠山辰也氏の2名が実習の講師を務め、10名の受講者が2班に分かれて路線選定、基本土工、応用土工、安全作業等

について学んだ。

受講者の中には、作業道開設の実績はあるものの自己流で作業を行っていた者も多く、本研修では受講者が積極的に講師に質問し疑問点を解消しながら研修が進められた。受講者からは基本的な技術のほかこれまで経験の無かった丸太組みや洗い越し等の施工方法を習得でき、講師の説明も的確で分かり易く大いに参考になったとの感想が多数寄せられた。

本研修制度は本年度で終了することとされているが、受講者からは更なる研修の実施を要望する声が上がっている。



丸太組みによる土留め工の作業状況

**林業関係施策に関する
要望活動・理事長講演**

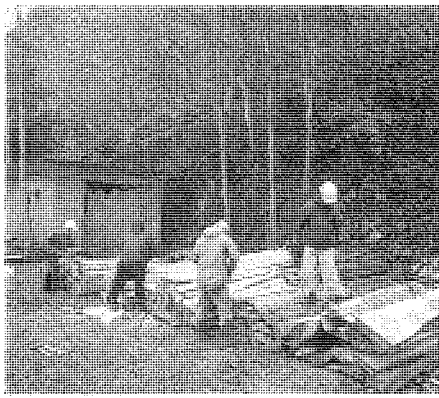
岩手県森林・林業会議による岩手県議会・岩手県農林水産部への平成29年度林業関係施策に関する要望活動が10月27日、盛岡市において開催され、当組合から鈴木理事長、高橋常務理事が参加した。要望事項は次のとおり。

- ①再造林強化対策の推進(森林整備に要する財源の確保、コンテナ苗木生産施設への設置に対する助成等)
 - ②用途に応じた原木の適正で安定的な供給等(原木の安定供給、林地残材利用の実現、大径材の利用促進等)
 - ③治山林道事業の推進(治山林道予算の確保、台風10号被害の早期復旧等)
 - ④担い手対策の充実・強化(森林資源循環利用推進ビジョン)の実行計画の策定、マネジメント教育の強化等)
- 要望活動に続いて、県議会森林・林業政策研究会(会長・柳村岩見議員)主催の研修会と林業関係団体等との懇談会が開催され、当組合鈴木理事長が「最近の木材需給の状況と林業での地域再生」と題し講演を行った。

台風被害支援まきプロジェクトを開始

当組合は、8月30日の台風10号により薪を流失した家庭を支援するため、今般「台風被害支援まきプロジェクト」を開始した。

今回のプロジェクトは、岩泉町の山間部の家庭で今冬用に準備していた薪を流され困っているという事を報道で知り、組合員に薪の無償提供を呼びかけて急遽始まったものである。当組合から岩泉町役場に薪用原木の提供を申し出たところ、原木を探していた薪作り支援のボランティアグループ（浅井朝明氏代表）を紹介され、当組合が原木を安家地区に届け、同グループが薪に加工して各家庭に配ると



まき作りを行うボランティアの皆さん

いう連携がタイムリーに決まった。

冷え込みが一段と厳しくなった10月29日、支援まき第一弾として組合員から提供された25トントラック1台分の背板を届けた。長さ2mの背板はボランティア参加者により30cm程度の薪に加工され、早速、困っている住民に届けられることとなった。

当組合では原木等の無償提供の申し出があつた組合員にご協力いただき、今後数回にわたって支援まきを届けることとしている。

伐採・地拵え一貫作業研修会

盛岡広域振興局林務部主催の伐採地拵え一貫作業研修会が10月31日、八幡平市において開催され、管内の森林管理署行政機関及び林業事業者等約30名が参加した。

研修会では当組合の外館経営企画部長が講師を務め、当組合における低コスト再造林実証試験の取り組み状況について、実証試験地において説明した。

長野県から視察団来県

長野県の東部に位置する佐久地域の森林組合、林業事業者の役職員6名による視察団が、当組合における木材の生産性向上と低コスト化、再造林の取り組み状況等について視察するため、10月31日から11月2日にかけて来県した。11月1日は当組合員の小岩井農牧(株)山林部(筆石町)において、同社有林の経営及び素材生産について、山林部課長の吉田弘行氏から説明いただいた。同社有林では年間の伐採量を林分の成長量分としており、持続可能な森林経営を実践している。視察では約100年生のアカマツと約50年生のカラマツ伐採現場等を見学した。

続いて当組合員の横澤林業(株)(岩手町)横澤孝一社長・孝志専務の案内により、盛岡市玉山区のカラマツ伐採現場と造林地において、素材生産から再造林、下刈りまで一手に行っている同社の取り組みとカラ

国有林素材山元委託販売 入札結果

市日：平成28年10月27日(木)

市場：岩手南部森林管理署(第3回)

(参加者人数 6名)

売払番号	樹種	長級(m)	径級(cm)	等級	本数	材積(m ³)	応札枚数	土場
603-1	スギ	4.00	16-40	中玉・中玉B	299	61.780	3	鈴鴨
603-2	スギ	2.00	16-36	込	60	7.218	2	鈴鴨
603-3	スギNA	4.00		低質		18.295	1	鈴鴨
603-4	スギNA	2.00	16-38	低質	70	8.287	1	鈴鴨
603-5	スギNA	2.00		低質		4.990	1	鈴鴨
603-6	その他NA	2.00	10-38	低質	12	1.874	0	鈴鴨
603-7	LA	2.10		低質		3.081	1	鈴鴨
603-8	LA	2.10		低質		22.030	2	鈴鴨
603-9	LA	2.00		低質		4.150	1	鈴鴨
603-10	スギ	3.00	16-18	中玉	18	1.506	2	駒ヶ岳
603-11	スギNA	2.00		低質		15.600	1	蟹之巢
合計					459	148.811		



横澤林業(株)伐採現場での視察の状況

マツ再造林地の状況について視察した。

ちよつと気になる木の話 4

大径材利用は本当に未知の課題か？

NJ素流協の組合員会議で、スギ大径材の利用法はと問われた。

今、林業雑誌を見れば、最新研究紹介に「スギ大径材利用に向けたスギ心去り製材の強度性能と乾燥スケジュール」という宮崎県木材利用技術センターの研究員の研究成果が載っている。

この中で、「スギは心を外してしまふと、反りや曲がり、ねじれが生じる。また、強度も心持ち材に比べ劣る」といった使い手側(工務店等)の意識が強く、構造材としての利用は進んでいないのが原状です」とある。

思い出せば、宮崎をはじめ九州は心去り柱割角利用のメッカであった。昭和50年代、3mの36cm上の割角丸太をジャンジャン供給していた。その工場は、宮崎県西都市を中心としていた。しかし、国有林からの供給が途絶えるとともに衰退していくこととなる。当時は、明治32年から大正10年にかけての国有林特別経営区時代の山が丁度

伐期を迎え、大量供給されていた。宮崎県須木村時代の記憶では、6玉まで

無節の割角用材だった。ということは、18mまで末口36cm上で枝打ち完了材となる。この頃は、今もてはやされるスギ中目材(24×32cm)の用途が無く、逆に苦勞していた。

ここで、突然秋田県北センターの誕生である。当時の秋田局が天然秋田スギ減伐計画により3分の1に伐採量を減少させる。そこで、困り果てた製材業界はふとあることに気がつく。特別経営区時代の高齢級人工林スギを九州まで運んでいく業者がいるが、一体何に使っているのかである。丸太が運ばれていた内陸部奥に位置する熊本県球磨郡多良木町へ向かい割角(心去り角)を目にするのである。秋田に帰り、一斉に大径材の割角づくりに奔走し、産地市場として秋田県北センター誕生、隆盛となる。

この時の買い手は、新潟から山陰に至る日本海側の各県、そして九州である。この品物を扱うことによつて九州

市場で大きくなった製品市場は名前を変えて、大手木材企業となっている。

当時の三大割角産地は、秋田、福井、徳島で、九州をブロックに分けて流通していた。

当時の記憶では、九州の大工・工務店は心去り柱でないと狂うので使えないと言っていたため、大径材が切れた九州では心持ち柱を製材しながら、九州外への販売を行っていた。うぐん。さっきの文章とは真逆だな。AD(エアドライ：天然乾燥)の時代、心持ちは乾燥が難しく、必ず背割りを入れていたものである。国有林における特別

経営区時代の林分を伐り尽くし、民有林では戦中伐採によつて伐りすぎた後は、心持ち柱しか無かったのである。今大径材になったときには、もっと使い途があるはずである。大きく違うのは、製材が大型化し、規格品のスピードを求め、効率化を最優先としており、かつての台車挽きの工場が姿を消しつつあることである。大径材の利点は、

大径化した白太部分の品質が年輪幅も詰み、極めて良いことにある。いわゆる成長量を巨大な輪の外側で分散

蓄積していると言える。割角時代も外側の肌のキレイさは評価が高かった。

今、割角を再割りする征平は、その最たるものであるが、辺材部分を小角・内装材としてメイン商品とすれば、極めて評価は高いと考えられる。もちろん割角の復活も可である。

スギ大径材問題は九州から始まっているが、かつての逆を見ているようである。基本は「大は小を兼ねる」である。まだまだ可能性は高い。

ここで、特別経営区(山が沢山残っている)といえ、ビックリするかもしれない。それは、木曾にある。木曾は御料林で、明治大正にかけて、大量の造林をしている。しかし、天然木曾ヒノキ全盛時代、天然木曾ヒノキで収入が得られたため、特別経営区時代の人工林ヒノキは、大量に残ることとなる。そのため、林齢の山はフタコブラクダ状態である。15〜21齢級に大量の材積が蓄積されている。となれば、大径材と思いきや、人工林ヒノキのため径級は細い。しかし、今後の寺社仏閣用には期待できる。大径材問題はやはり、スギとなる。

平成 28 年 10 月 分 の 販 売 実 績

樹種	合板用			その他 製材用等			計		
	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	9,696	101.1	119.9	8,818	120.7	144.0	18,515	109.6	130.3
カラマツ	1,857	88.4	48.2	231	33.9	47.3	2,089	75.0	48.1
アカマツ	1,364	60.6	56.0	141	124.9	97.6	1,505	63.6	58.3
その他針葉樹	0	*	0.0	647	*	*	647	*	708.6
広葉樹	0	*	*	395	201.1	229.7	395	201.1	229.7
合計	12,918	92.6	89.3	10,234	123.3	147.6	23,152	104.1	108.2

樹種	バイオマス用素材		
	当月出荷量 (t)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	6,041	98.2	184.3
カラマツ	1,298	123.6	66.1
アカマツ	854	199.3	89.3
合計	8,192	107.3	132.2

樹種	今年度累計			
	合板用 (m ³)	その他 製材用等 (m ³)	計 (m ³)	バイオマス (t)
スギ	57,692	40,381	98,072	31,849
カラマツ	15,242	7,044	22,285	11,733
アカマツ	14,738	1,239	15,978	8,932
その他針葉樹	0	647	647	0
広葉樹	0	701	701	0
合計	87,672	50,012	137,684	52,514
目標達成率(%)	48.7	50.0	49.2	58.3
計 画 量	180,000	100,000	280,000	90,000

注) *印は前月又は前年同月実績がなかったことを示す。

【平成28年10月の需給動向】

- スギ・カラマツ製材用原木は在庫減少傾向にあり引き合いが強まっている。
- アカマツ原木は伐採制限期間が終了。合板用アカマツも少しずつ引き合いが強まっている。
- バイオマス用素材（低質材）の引き合いが更に強まり、素材入札価格が高騰している。

耳からウロコ

材木町から思いを巡らす

ここ盛岡市内に材木町の地名がある。城下町によくある寺町、穀町、紺屋町、馬場町等と一緒に、材木町の集中した場所との意味である。全国的に見れば、釧路、遠野、会津若松、金沢、静岡、上田、岡崎、京都、岸和田、佐賀、唐津等膨大な数の材木町が存在する。現在使われていないが、名古屋市中区材木町(現在の丸ノ内の一部)も材木町だった。それだけ、江戸時代の木材の地位が高かったと言える。

時代劇の悪者にも材木商が登場する。金沢には材木町小学校、仙台にも南材木町小学校が実在する。

一方、観光地で有名な鎌倉には、材木座海岸がある。鎌倉七座の一つで、他に関連業種として炭座もある。座とは商工組合で独占的販売権を付与されていたと言われるので、現代に直せば独占販売木材商工組合町といったところか。

この他にも京都には木屋町があり、有名な高瀬川沿いに同様の木材問屋街があった。最初は樵木町(こりきちよ

う)通りと呼ばれていたという。それでは、江戸はといえば、現在も地名が残る木挽町(現在の歌舞伎座あたり)があり、岐阜、名古屋にも存在していた。これは、製材職人町といったところか。明治期以降、東京では、木場、新木場が当然の如く認識されている。

ザッと眺めてみると、主要な城下町の城の周りにあり、近くに川や堀があるところが条件のようである。需要地にあり、流送が輸送手段のための立地と言える。現在、この地に材木商が林立しているところは、ほとんど無いと言える。大阪に鳥飼銘木町の地名があるが、ここは銘木商が集団で移動した場所、木材工業団地に町名が付いた感じである。ウッドファースト社会になれば、大消費地に再びとも思うが、物流の発達で地方に立地することになるかもしれない。そういえば、プレカット工場は都市のド真中ではなく約100km離れた場所が物流の観点から好条件と言われる。

かつて、国有林所在では、営林町1・2丁目、王子町(旧王子製紙の工場跡)など直接的な町名があった。